Osaka University Knowledge Archive

Title	コーランのアラビア語における条件文構造の分析 ：古典アラビア語成立過程の解明に向けて
Author(s)	森口, 明美
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58749
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

氏　　名	森　口　明　美
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第　１６　号
学位授与年月日	平成１４年３月２７日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	コーランのアラビア語における条件文構造の分析 （古典アラビア語成立過程の解明に向けて）
論文審査委員	主　査　　教　授　　高　階　美　行
	副　査　　教　授　　橋　本　　勝
	副　査　　教　授　　勝　田　　茂
	副　査　　教　授　　藪　　司　郎
	副　査　　教　授　　竹　田　　新

論文の内容要旨

イスラム世界の文学、学術語（文語アラビア語）の基礎である古典アラビア語は、イスラム成立後、コーランなどで使われていた前古典アラビア語が規範化され定型化されたものである。

イスラム成立初期におけるアラビア半島では、地域や部族によってさまざまな方言が使われ、アラビア語の理解に揺れが生じていた。また非アラブ人のムスリムたちがアラビア語を習得するためにもアラビア語の体系化は、不可欠だったのである。

一般に、このアラブ文法学の枠組みは、すでに8世紀にSībawayhの*al-Kitāb*（書物）によって完成されたと見なされている。

つまり、*al-Kitāb*には前イスラム期の韻文やコーランのアラビア語の言語現象が網羅的に記述されており、その後の発展といえば、*al-Kitāb*の枠組みの中でより分かり易く、簡便な記述を達成することであった。その結果、al-Zamakšarīの*al-Mufaṣṣal*（詳説）を始めとする数多くの文法書がアラブ世界における共通の教科書として広く利用され、今日のアラブ文法学の規範となったということである。

これまでは（前イスラム期の韻文やコーランに使われている）前古典アラビア語と古典アラビア語の概念はすでに導入されており、両者の違いについて指摘されているものの「前古典アラビア語の統語体系」「*al-Kitāb*の文法理論の枠組み」「*al-Kitāb*以降（たとえば*al-Mufaṣṣal*）の文法理論の枠組み」「MSA（現代標準アラビア語）の統語体系」の4つの概念の違いを明瞭に意識した研究は知られていない。

本研究では、この異なる4つの概念を区別し、コーランのテキストを言語コーパスと位置づ

けて、コーランのアラビア語の条件文構造の分析を行う。

本研究は、アラブ文法学における条件文の記述を統語分析の基準とするが、その記述には主としてal-Zamakšarīの *al-Mufaṣṣal*を利用する。本来ならばアラブ文法学史上最も重要とされるSībawayhの*al-Kitāb*を基準とすべきであるが、*al-Kitāb*の記述には多様な解釈が提出され、未だ共通理解も得られていないので、本研究の目的にはふさわしくないと思われる。むしろ、*al-Kitāb*の枠組みを忠実に継承しつつも項目の整理、整然とした秩序立て、用語の明確化に主眼をおいたとされる*al-Mufaṣṣal*の方が適切であると判断し、決定した。

なお、今回の分析対象は条件文に限定する。条件文は、森口(1999)において、古典アラビア語の成立過程でアラビア語が大きく変化したことを示唆する言語現象のひとつであると明らかにしたものである。

非常に限定的な範囲ではあるが、詳細な分析によって目的の達成を目指すものである。

論文は三部から構成される。まず第Ⅰ部（第１章、第２章）では、古典アラブ文法学における文法記述の方法論の分析と本研究の方法およびその枠組みの決定を行う。

コーランのアラビア語に見られる言語現象の分析を*al-Mufaṣṣal* の記述に依拠するためには、アラブ文法学においてコーランの言語現象が網羅的に記述されていること、*al-Mufaṣṣal*が*al-Kitāb*の文法的枠組みを忠実に継承していることを確認する必要がある。そのため第１章では、*al-Kitāb*と*al-Mufaṣṣal*の一般的な評価を確認した上で、両者の条件文に関する記述の比較を行う。その結果、少なくとも条件文に関しては、1) コーランのアラビア語の言語現象が網羅的に記述されているわけではないこと、2) アラブ文法学の枠組みは*al-Kitāb*以降の研究発展を経て完成されたこと、3)完成された文法学においてもコーランのテキストに依拠した分析研究に必ずしもなっていないこと、が明らかとなった。したがって、古典アラブ文法学の記述を念頭におきつつも、コーランを言語コーパスとして直接観察する必要が生じたのである。

第２章では、本論文で使用する術語の定義を行う。本研究では、動詞の意味素性による各形式が表すアスペクトも分析対象とするが、意味素性による動詞の分類は、McCarus(1976)を一部修正を加え利用する。

さらに本分析に関係すると思われる英語における条件文の統語規則と*al-Kitāb*、*al-Mufaṣṣal*、アラビア語の伝統文法における条件文の記述の概要をまとめておく。

第Ⅱ部（第３章～第７章）では、コーランにおける条件文の分析とその評価を試みる。さらに第８章（補説）では、前イスラム期の韻文にみる条件文の分析を行う。

第３章では、条件節における動詞形式（prefixal／suffixal）の分析を行った。コーランのアラビア語においては、in節の動詞形式の相違は、行為や状態に対する話者の認識方法の相違に由来する。つまり話者が行為や状態の可能性だけを想定する場合にはprefixalが使われ、行為や状

態の成立を想定する場合にはsuffixalが使われる。一方、law節では、ʾin節と異なり、動詞形式が話者の行為や状態に対する認識により使い分けられることはない。これは、条件詞 lawが本来持つ事実と異なる非現実的な想定という機能が、動詞形式の相違を押し隠すためと言えよう。

第４章では、条件節における動詞kānaの機能の分析を試みる。先行研究では条件節におけるkānaの機能を過去への言及と条件節の標識と見なしているが、その見方では整合的に説明することが困難なさまざまな問題点が挙げられる。ʾin節におけるkānaは、いかなる場合でも時間に言及することはなく、発話時における過去に描写された状態やその変化の残存の可能性を想定するし、この状態やその変化の残存に対する話者の認識の相違によってkānaの形式（kāna／yakun）が決まる。一方、law節では、kānaが時間、行為・状態の成立状況の認識（完了、継続、習慣）に対し言及することはないと言える。

第５章では、帰結節の動詞形式の分析を行った。条件詞ʾinによる条件文は、条件節の動詞形式と帰結節の動詞形式が同一の場合（ʾin＋pre.－pre.、ʿin＋suf.－suf.）は帰結節にfaが接頭されず、そうでない場合にはfaが接頭するという規則がある。つまり接頭辞 faは、条件節と帰結節の切れ目が不明瞭な場合の帰結節の始まりを示す標識と考えられる。一方、条件詞 lawに導かれる条件文では、帰結節の冒頭部分が否定詞mā以外の場合は、例外なく接頭辞laを伴う。この単純で明解なlaの接頭規則は、laの接頭が義務的でない古典アラビア語と異なる現象である。このlaの接頭規則については、第８章、第10章にて再度論じる。

第６章は、条件文の構造に関する分析である。本章では、条件節の倒置／挿入、譲歩表現、条件節における動詞šāʾaの機能、la-ʾin…la構文を扱う。条件詞ʾinによる条件文は、条件節の倒置／挿入により、条件節は但し書きや断り書きのように主節（帰結節）を補足する節として機能している。この場合のʾin節の動詞形式はsuffixalに限定されるが、倒置により発話者の陳述や判断（帰結節）が、条件の提示が行われる以前に成立するため発話者の意識に対して後続するʾin節でも対応する動詞形式（suffixal）の使用が促されたと推察される。一方、law節が倒置する構文に関しては、基本的に願望の表現と見なされる。つまり条件詞 lawが導く条件文において倒置構文は存在しないことになる。

コーランでは、条件詞ʾin／lawに導かれる条件節がしばしは譲歩の意味を表すが、条件／譲歩のいずれかであるかは文脈への依存が非常に強い。その一方で、構文的にきわめて特徴的で明瞭な譲歩構文であるwa lawの存在も確認される。この構文は古典アラビア語において譲歩表現形式として定着し、アラブ文法学では代表的な譲歩節に定義されたと考えられる。

いわゆる「神のご加護」を表す動詞šāʾaを、使用される条件詞および条件節の位置により、４タイプに分類し、それぞれにおける šāʾaの用法の分析したところ、šāʾaは条件詞や条件節の位置により必然的に要求される動詞形式により、神の意志の存在を前提とした不可避的な真実や事

実と逆の想定による神の意志の絶対性を効果的に示していることが明らかとなった。

la-ʾin…la構文は、条件節と帰結節にlaを反復するという形態的な特徴と特殊で個別的場面における行為や状態の想定という意味的特徴を備えた独自の構文と見なすことができる。つまり条件詞ʾinの機能と条件詞lawの機能とは明瞭に区別され、その中間的で個別的、具体的できわめて可能性の低い条件を提示する機能をもつと考えられる。

第７章は、条件文の否定形式の分析である。条件詞 ʾin／lawに導かれる条件文の帰結節を否定する場合、コーランにおいては、古典アラブ文法学で一般的とされるlam＋prefixal形式が全く使われていないことが明らかとなった。この事実に関してはいずれの先行研究にも言及されていない。この現象は古典アラビア語の成立過程においてアラビア語が変化した可能性を示唆すると考えられるので、条件詞ʾin／lawの帰結節における否定形式についての通時的な視点からの分析を第８章にて行う。

第８章（補説）は、前イスラム期の韻文をテキストコーパスとして、本研究の結果コーランのアラビア語にのみ特徴的ないくつかの言語現象について、通時的な視点からの分析を試みるものである。韻文のテキストコーパスとしてのさまざまな制約によりその分析結果は、留保条件を伴う作業仮説的な性格のものとならざるを得ないが、コーランには全く観察されないが、古典アラビア語では一般的とされる言語現象がすでに前イスラム期の韻文に存在することが確認された。

第Ⅲ部では、第Ⅱ部で明らかにしたコーランのテキストの特徴と、既に森口（1999, 2001a,b）やその他の先行研究が指摘する古典アラビア語の統語現象の比較分析を試みる。

第9章は、条件詞iḏāの成立過程の観察である。コーランにおいては、本来時の辞詞であるʾiḏāは文脈により時の副詞節を導いたり、条件節を導いたりするが、両者の区別は非常の困難である。その反面、条件詞ʾinとʾiḏāは、話者が条件節の内容に時の概念を含む（ʾiḏā）か含まない（ʾin）かで明瞭に使い分けられていたと言える。ところが古典アラビア語ではʾiḏāがʾinと同じ現実的な条件を表す条件詞として使われるようになり、両者の区別は次第になくなる。その結果ʾinの使用が減少し、ほとんど使われなくなっていったのである。

第10章は、条件詞lawの成立過程の分析である。law構文には、第８章で扱った否定形式や帰結節における接頭辞la以外に、古典アラビア語と異なる言語現象が存在する。たとえば第3、4章で明らかにしたようにlawの条件節には複数の動詞形式が共存するが、ʾin節と異なり動詞形式が行為や状態に関する話者の認識を示すわけではない。一方、古典アラビア語では動詞形式はsuffixalに限定される。これはコーランのアラビア語においては本来 lawが持つ非現実的な想定という機能が動詞形式の相違を吸収するのに対して、古典アラビア語では lawが条件文構造としての動詞形式を要求するためであると考えられる。

条件詞lawは、前イスラム期の韻文、コーラン、古典アラビア語のいずれにおいても願望表現として使われている。本来願望には自明のこととして、非現実的な条件あるいは事実に反する条件が前提となるため、lawが願望の表現に使われていることは、すなわち非現実的な想定という本来のlawの機能から非現実的な条件を示す条件詞lawへの移行を意味すると言える。しかし前イスラム期の韻文およびコーランにおいては「願望」と「事実と反対の条件」は意味的にも構文的にも未分化な状態であった。

第11章は、条件詞 ʾinとlawの『条件』の射程の分析である。アラビア語における「ʾinが現実的な条件を表し、lawが非現実的な条件を表す」という基本的な原則は変わることはない。しかししかしコーランのアラビア語では、この枠組みが話者の主観的判断を基礎とするものであり、そこが客観的判断を基礎とする古典アラビア語の枠組みとの大きな相違点であると言えよう。そのため話者の主観的判断と客観的判断が異なる場合には、古典アラビア語で使用される（と考えられる）条件詞と異なる条件詞が選択されるため、結果的にコーランでは条件詞 ʾinとlawの混同や交替があると見なされたのであろう。一方、古典アラビア語における条件詞lawは、客観的な判断による事実と異なる非現実的な条件を想定する条件詞として使われ、その傾向は近・現代の散文において顕著である。

第12章では、ʾin節における動詞形式の分析を行った。コーランにおけるʾin節の動詞形式（pre／suf.）の選択が、条件節の行為や状態に関する話者の認識方法の相違に由来することは第3章で明らかにした。ところが古典アラビア語ではすでに初期の段階で、動詞形式と話者の認識方法の照応関係が希薄となり、実際には、話者の認識に関係なく常にsuf.が使われている。つまり、古典アラビア語のʾin節の動詞形式（suf.）は、コーランのテキストにおける動詞形式（suf.）とは異なり、単なる条件節の標識として機能すると考えられる。話者の意識が条件節の動詞形式に反映されるコーランのアラビア語と、動詞形式が単なる条件節のマーカーにすぎない古典アラビア語の間には明らかに統語的な相違が存在すると言えるであろう。

終章では、前イスラム期の韻文については暫定的であるが、本研究により明らかとなったコーランに特異的な数多くの言語現象を、アラビア語の通時的変化の視点から試みに論じまとめた。

以上の分析により、コーランのアラビア語が古典アラビア語の基礎であることは間違いないとしても、古典アラビア語と異なる独自の統語体系を持つ言語であることを指摘することができた。つまりコーランのアラビア語はアラビア語言語史において、独立した特異な言語体系をもつ言語と位置づけられる。したがって「コーランのアラビア語の統語体系」と「古典アラビア語の統語体系」の概念を明瞭に区別するという本研究における基本的姿勢の正当性が実証されたと言える。今後はさらなる分析を行い、コーランのアラビア語の統語体系の全貌を明

らかにするつもりである。コーランのアラビア語の統語体系の解明が、古典アラビア語の成立過程の本格的な解明に寄与するものと確信している。

論文審査の結果の要旨

森口明美氏執筆の博士論文『コーランのアラビア語における条件文構造の分析（古典アラビア語成立過程の解明に向けて）』の審査に際して、別紙記載の評価を得るにいたった審査の概要は以下のとおりである。

執筆者は、7世紀に成立したコーランから現代にいたるまで書き言葉としてのアラビア語には基本的に変化がなく、アラブ・イスラム文化の特異な現象としていわゆる「文語アラビア語/古典アラビア語」が使用されつづけているとの一般的見解に対して強い疑問を抱き、習得される言語としての文語に音韻と形態上の変化は観察しにくいかもしれないが、統語的現象の分析によれば通時的な変化を認識できるはずであるとの立場から、修士論文（１９９９年）では膨大な古典アラビア語の文献の中から主要な時代ごとに代表的作品を選び比較検証することにより、限定的ではあるが自説の有効性を実証した。その後執筆した論文（２００１ａ）では、古典アラビア語の条件文構造に的を絞った研究を行うことにより、現代標準アラビア語では多様な構文的選択肢のいくつかが定型的表現として固定化されるにいたる経緯を明らかにした。この経緯から、アラブ文法学が条件文構造をどのように記述しているかを調査し、別の論文（２００１ｂ）では、その基本文献が主要な条件詞の一つ law を取り上げていないなど、コーランの統語現象の完全な記述となっているわけではないことを指摘した。

こうした研究の発展として執筆された本論文で解明すべき課題は、主として次の３点であった：①前述のようにアラブ文法学の記述範囲がコーランの統語現象を網羅しているわけでなくコーランのアラビア語独自の文法記述もないことに鑑み、条件文とそれに関連する統語現象に関しコーランのアラビア語を詳細に分析し記述すること、②前項で抽出される結果を、修士論文と森口（２００１ａ）で得られた古典アラビア語の分析結果と比較対照し、コーランのアラビア語、古典アラビア語、現代標準アラビア語との間に条件文の統語構造に関する通時的変化を実証すること、③コーランのアラビア語が古典アラビア語の統語システムと異なることを予測し、前イスラム期の韻文テキストにおける関連現象を可能な範囲で調査することにより、イスラム以前からの連続性の中にコーランのアラビア語を通時的に位置付け、他の古代諸セム語の統語的特徴と対照させる中で「古典アラビア語」的でない現象の説明を試みる、などである。以下には、この順で本論文がどこまで到達しえたかを簡潔に述べる。

第Ｉ部（序章、１－２ 章）で上記のような問題意識と課題を設定し、そのための分析の枠組みを論じた後、第Ⅱ部（３－８ 章）で上記①の課題を、条件詞ごとに条件節の動詞形式を分類してその機能を実証し（３章）、補助動詞kaanaとの組合せによる複合形（４章）と帰結節の動詞形式（５ 章）に関しても同様の分析を行った後、条件節が後続する場合の統語現象、譲歩構文、共起関係にある副詞laと条件詞'inが形成する独自の条件文形式などを代表的な条件文構造との相関関係において解明した（６ 章）。条件節と帰結節における否定形式のみに着目した分析（７ 章）は、従来看過されてきた事項であるが、帰結節の否定にlam+要求法が存在しないという愕くべき事実を発見している。前イスラム期の韻文テキストの分析（８ 章）の結果は、古典アラビア語と前イスラム期のテキストに存在するのにコーランのアラビア語には見出せない現象があることも指摘するなど、多くの重要な事実

を確認した。

第Ⅲ部（9－12 章）は、個々の条件詞が導く意味領域の成立過程を検証し、古典アラビア語以降に多用される「条件詞」'idhaa がコーランのアラビア語において持つ意味機能などを分析した。ここにおける主要な論点は、条件詞の選択と動詞形式がコーランにおいては発話者の主観的判断に依存するが、古典アラビア語においては条件表現としての定型構造に規範化され両者間に変化があるとの指摘である。

以上の分析で得られた多くの新知見は、終章においてアラビア語統語現象の通時的変化の枠組みの中で再解釈が行われている。コーランの中にはあるが古典アラビア語にはない現象、古典アラビア語以降に見られる現象、前イスラム期と古典アラビア語にはあるがコーランのアラビア語には存在しない現象などの確認は、従来のいずれのアラビア語研究においても実証的に論じられたことはなく、前記②の課題を十分達しえたと評価される。

他方、上記③に述べた課題の一部である他のセム諸語の統語現象との比較にまで論じ及ぶことは事実上できなかったこと、したがって、それを前提として使用した術語の一部（動詞形式の従来の用語の代わりとして prefixal/suffixal）が逆に煩雑さを生み出したこと、動詞形式選択の要因の一つの可能性として検討した動詞の意味素性による分析の視点に実証分析上とらわれすぎたことなどの弱点は、率直に指摘せざるを得ない。また、本論文の視野を越えるとはいえ、コーランのアラビア語テキストの成立経緯と時代環境、社会的変化の中で古典アラビア語の規範化が求められた時代状況とアラブ文法学の発展と限界などの枠組みが明瞭に提示されていたならば、本論文の成果が理解しやすかったであろうことも事実である。

しかしながら、本研究はコーランという長大な古典テキストを多面的にかつきわめて詳細に分析した、克明な実証的研究として高く評価される。13 世紀以上もの長期間の「古典」アラビア語史に対する通時的研究の有効な方法論として統語構造の分析がもたらしうるものを具体的に示したこと、それにより、コーランのアラビア語がアラビア語史の中において独自の統語体系をもつ言語であることを事実により実証したこと、前イスラム期の韻文テキストのアラビア語史解明への資料的活用の端緒を開いたことなどはこの研究がもたらした大きな貢献であり、今後この分野の研究で参照されるべき力作であると言えよう。